マッセ・フォーラム

「平成21年度　小地域ネットワーク活動リーダー研修会」

開催日：平成22年２月25日（木）
会　場：大阪国際交流センター

マッセ・フォーラム
平成21年度 小地域ネットワーク活動リーダー研修会
～だれもが安心して暮らせる福祉のまちづくりをめざして～
「小地域における要援護者への支援と見守り体制の構築について
～認知症の方および障がい者の孤立防止を目指して～」

コーディネーター
松端　克文　氏（桃山学院大学社会学部社会福祉学科　准教授）

パネラー
鈴木　恵子　氏（ボランティアグループ「すずの会」
(神奈川県川崎市宮前区野川)代表）
西岡　義晃　氏（池田市社会福祉協議会 石橋南地区福祉委員会 副委員長）
西尾より子　氏（池田市社会福祉協議会 石橋南地区福祉委員会 花花部会）
西村　光雄　氏（岸和田市社会福祉協議会 新条地区福祉委員会
小地域ネットワーク活動推進委員会委員長）

（松端） 皆さん、こんにちは。桃山学院大学の松端です。よろしくお願いします。

先ほど事務局長からもお話がありましたが、例えば自殺者の数は1998年以来12年間ずっと、毎年３万人を超え続けています。それから、今日のテーマにもかかってきますが、亡くなられた後、誰にも発見されずに何日間か放置されてしまうような孤立死、あるいは孤独死の問題が社会問題化しています。最近では介護をめぐる殺害事件や心中事件も頻発しています。1990年代にもそういう事件もあり、それで社会的に介護していこうということで介護保険が導入されたわけですが、介護保険がスタートして10年余りたった今でも、介護を苦にした殺害や心中事件が後を絶ちません。それから、格差社会を背景にした貧困も大きな問題になっています。特に雇用の破壊の問題は非常に深刻で、仕事がなくなり、家族が崩壊し、アルコール依存になるような事例が多く報告されています。先ほど孤独死・孤立死のことを言いましたが、実は高齢者だけでなく、50代～60代前半という比較的若い方の孤立死や孤独死も問題になってきています。

そういう意味で、今日の社会では今までの社会福祉が想定していた以上に深刻な生活上の課題が噴出しているわけですが、あえて一言でキーワードを言うとすると、やはり「孤立」だと思うのです。社会的に孤立して、地域の中で独りぼっちの状況で生活している方に、負のスパイラルのようにさまざまな困難

がどんどん振りかかってくるような状況ではないかといえます。つまり、不運と不遇のスパイラルのようなところがあるのではないかと思います。

特に、認知症や障がいなどの特別な困難があれば、より一層その孤立感が強くなっていくのではないかと思うのです。先ほど、介護保険が始まったけれども殺害があるという話をしましたが、介護保険を利用してヘルパーさんが来てくれていたり、あるいはデイサービスの利用をしているにもかかわらず、介護を苦にして殺害するケースがあるわけです。ですから、公的な福祉サービスを使えば生活の課題が解決されるのかというと、決してそうではありません。確かに、今回、政権交代もあり、福祉の政策・制度もこれからさらに変わる可能性がありますけれども、単に政策や制度が充実すればそれで私たちの生活がより豊かなものになるかというと、決してそうではないわけです。

そこで、今日のパネルディスカッションでは、はるばる神奈川県川崎市から来ていただいた鈴木さん、地元大阪の池田市の西岡さんと西尾さん、そして岸和田市の西村さんからご報告をいただきながら、私たちが地域の中でより豊かに暮らしていくためには一体何ができるのか、あるいはどんなことをしていかなければならないのかということを、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

それでは、まず鈴木さんから、すずの会を立ち上げて10年余り活動をされてきていますので、その実践報告をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【実践報告１】

鈴木　恵子　氏（ボランティアグループ「すずの会」（神奈川県川崎市宮前区野川）代表）

（鈴木）　皆さま、こんにちは。随分久しぶりで大阪に来たら、地下鉄の乗り降りが難しくて、大阪の駅でうろうろしてしまいました。先ほど、「恵子さん、大丈夫？」とうちのメンバーさんから電話があって、「いや、めちゃくちゃ緊張しています」とメールを出したら、「大丈夫よ。行きなさい」と言われて、肝を据えて皆さまにお話ししたいと思います。

大阪にはこんなに大勢の方のパワーがあるのだなと、あらためてすごさを感じております。私は川崎市宮前区野川というところで活動しています。本当に

小さな活動なのです。小さな小さな活動なのですが、15年の実績を積んでまいりました。15年こつこつやってきたことがやっと少しずつ地域の中で芽生え始めたかなという、まだひよっこの活動ですが、皆さまは小学校区の活動を主にやっていらっしゃるということなので、私たちの活動が何かヒントになればと思います。

1．すずの会とは

私たちの活動は、川崎市宮前区の野川という、町ひとつの活動です。実は、川崎市は人口が140万人を超えています。川崎市には７つの区があります。私たちが住んでいる宮前区は、区１つでも21万7,000人という大きさです。ですから、ボランティアグループにとっては区の活動でも難しいということで、身の回りの、本当に身近な町の活動をしています。

野川でも人口が２万8,000人おります。ただ、面積が非常に狭く、2.6㎢しかありません。私は普段バイクで移動していますが、大体10分あればぐるっと回れるぐらいの広さの中に、小さな市ひとつ分の人口がいるということです。

ただし、近所付き合いが非常に希薄になっています。大きな団地も２つ抱えていますが、既に築40～45年たっていますので、高齢化率が非常に高く、50％を超えている団地が１つあります。それと、大手の電鉄会社がやはり40年前に開発した住宅団地も高齢化が進んでいて、広い屋敷の中にぽつんと１人で住んでいるとか、高齢者だけの世帯になっているとか、中の様子が分からないような、非常に心配な人たちがたくさん住んでいる地域もあります。それと、昔ながらの地縁組織というのでしょうか、昔から住んでいる農家の方たちもたくさんいらっしゃるので、町内会や民生委員さん、保護司さんたちをまとめているような昔からの地主さんたちの組織もあれば、次々に新しく入ってくる若い人たちも非常に多いので、新旧混然一体となったような、まとめにくい町だと思っていただければと思います。

活動を始めたのは平成７年９月で、阪神大震災が起きて、ボランティア元年といわれた年です。私は親の介護が昭和61年１月１日から始まっていますので、約10年間、30代後半から40代を親の介護に費やしたわけです。ちょうどバブルの絶頂期でした。介護保険もまだないころでしたので、周りの人たちの力がなければ、とても１人のやりくりでは過ごすことのできない毎日が続いていました。

２．設立のきっかけ・目標

すずの会の活動の目標は、私の介護体験を地域で生かしましょうということだったのです。なぜそんなことになったのかというと、私が孤軍奮闘しているときに助けてくれたのは、小学校のPTAの仲間でした。息子たちが小学校５年生と２年生のときに親の介護が始まっていましたので、その仲間たちがたまにうちに遊びに来て「一緒にお茶を飲んで気晴らしのおしゃべりをしましょうよ」と言ってくれたり、中学や高校の父母会に出なければいけないときに母の隣に座って留守番をしてくれたり、ちょっとしたことを手伝ってくれたおかげで、私は何とか10年間在宅で母をみとることができたのです。そういう周りの力がなければ、在宅での看取りというところまでいけなかったと思います。

母の介護が終わったとき、大変な介護だったのでもうやめようと思ったら、そうはさせなかったのも仲間たちです。「あなたは今までさんざん私たちを使ってきたじゃないの。これからあなたがやる番よ」と後押しをしてくれて、「ちょっと困ったときに鈴を鳴らしてくださいね」という思いを込めて、５名からスタートしたのが「すずの会」です。ですから、「鈴木」の「すず」ではありません。ただ、今うちのメンバーには鈴木が７人いるので、みんな私のことを「恵子さん」と呼びます。下の名前で言わないと、「鈴木さん」と言うとみんなが手を挙げてしまうようなグループです。

私たちが目標にしていたのは、身近な人のつぶやきを生かして、「この人のために何ができるかしら」ということを考えながら活動を生み出していこうということです。そこから、「私だったらこうしたいわね」とか、私たちの身の丈に合ったような、「難しいことはできないけれども、ちょっとしたことならできるわ」という気安いやり方ができたら長続きするのではないか。それから、活動に人を当てはめるのではなく、その人のための活動を生み出していく。その人のための活動がみんなのための活動に生まれ変わっていくだろうということで、形に当てはめないような、自由な、緩やかな活動を次々に生み出してきました。

３．この人のための活動から、すき間になった生活支援

私たちがやっているのは、介護保険のすき間になったようなところの活動です。介護保険が始まっても、介護保険で賄えるサービスは点でしかありません。

そのほかのところをちょっとサポートできるような活動というのは、すき間になったようなところだろうと思いました。

介護者のサポートから始まったのですが、どんな活動を生み出したらいいのか、まずは地域の人たちの声を聞かなければいけません。活動を始めたときは手探りで、何をやったらいいのか分からなかったのですが、そのときに協力してくれたのが区役所の保健師さんでした。保健師さんが「町の中を歩いてみるから、一緒に歩かない？」と言ってくれて、保健師さんと地域の情報を集めながら、高齢者や障がいをお持ちの方など、ちょっと気になるような方のところを歩き回りました。支援が必要な方は、平成７年当時で126名でした。126名ぐらいなら何とかボランティアグループでもちょっとしたことができるかしらという思いで始めたのですが、今支援の必要な方は1,000人を超えています。そのくらい急速に高齢化が進んでいますし、地域の状況はこの15年間にがらりと変わってきています。

気楽な感じで始めたのですが、やってみたら問題を抱えた方たちが次々と私たちの元を訪れていらっしゃいました。ミニデイサービスを始めたきっかけは、スタート２カ月後に訪ねてこられたご夫婦でした。当時、私たちは１カ月に１回だけ「老人いこいの家」というところをお借りして活動拠点にしていたのですが、そこに60歳の男性が55歳の奥さんの手を引いてやって来ました。奥さんは歩くことはできたのですが、会話が成り立たず、食事もうまく飲み込むことができないぐらいに進んだ若年の認知症でした。

私は若年の認知症の方とお目にかかったのはそれが初めてだったので、とてもショックでした。ご主人は、「僕は60歳の定年と同時に妻の介護に専念しようと思って、次の仕事はやめて妻と２人の生活を始めました」とおっしゃいました。何カ月か妻と２人で生活してみたけれども、僕と妻が行く場所がない。１日２人で家の中にいるだけでは、妻とは会話もできないし、息が詰まる毎日を送っている。そこで、保健師さんに相談したところ、「すずの会に行ってごらんなさい」と言われた。すずの会に来れば僕たちのために何かが生まれるかもしれない。「私と妻が参加できる場所はありますか」と言って来てくれたその人のために、１カ月に１回でもいいから２人が参加できるような場所を作りましょうと始めたのが、ミニデイサービスです。

ミニデイサービスというのは、○○会という名前が付けられなくて、当時の

社会福祉協議会の方が「ミニデイサービスという名前があるらしい」と言うので、簡単に「ミニデイ」と付けていますが、ちょっとした地域のお集まりの会です。始めてみたら、次々に認知症の方や少し介護が必要になった方が介護者とともに訪れるようになり、今では年間1,900人もの方がお集まりになるような会に発展していますが、きっかけはその人のためだったのです。

ミニデイがどんどん大きくなっていくのですが、それだけでは地域全体を網羅したようなことがなかなかできないということで、次にご近所サークルを始めました。次々に活動を始めていって、たとえば喫茶店、公園での体操、介護者サポート、介護相談など、一般的なことはすべて地域の方からのご意向で、活動を続けています。

介護相談も、年間600件以上の相談を受けています。また、介護情報がないということだったので、介護保険の始まる直前に、身近にある情報を全部自分たちの手でかき集めて、介護が必要になったときの情報や、身近なお集まりの会の情報を集めたものを１冊にして､｢タッチ｣という情報誌も発行しています。もう５冊目になっていまして、2,900件の情報をまとめています。それもボランティアが足で確かめ集めた情報です。

４．広げる・繋げる地域ネットワーク

私たちの活動の目標は、「やってみましょうよ」です。身近な人との出会いから気付いたことや発見できたことを、どうやって自分たちでつなぎ合わせていけるのか。つなぎ場所がないと、すずの会だけではいい活動には結び付きませんので、地域のネットワークがとても大切になると思っています。そこで、2001年１月から、月に１回、地域ネットワーク会議を開いています。

実は､すずの会を設立した当初から､ネットワークが大切だということでネットワークづくりも活動の１つとして規約に入れてあったのですが、１つのグループでは難しいものがありました。特にボランティアグループが中心となってネットワークをつくるなどということは夢のまた夢でした。行政、社協、町内会など、何か大きな組織が中心となって、そこに住民が当てはめられていくというネットワークはあっても、住民が主体となったネットワークというのはなかなかつくりにくく、あなたたちのように勝手にやっているグループが中心になってもらっては困ると言われていたのですが、介護保険がスタートしたと

きに、住民主体のネットワークをつくるチャンスがやってきました。

川崎市の介護予防事業の一つとして、第１号被保険者（65歳以上の人）の保険料に10円上乗せして、その費用を財源として介護予防のためのネットワークをつくろうということになったのです。「すこやか活動」といいまして、地域の中で発見したことを活動に結びつけるとか、啓発活動をするなど、住民が主体となった介護予防のためのネットワークづくりに１団体30万円をつけてくれるという活動でした。私たちにとっては渡りに船で、１番に手を挙げたのですが、そこでも「駄目です」と言われました。私たちは既に７つのグループをつくっていて、そこに地区社協と民生委員さんと町内会に協力していただいて一つの組織をつくり、「野川セブン」というグループで申請したのですが、他の区は地区社協や町内会が中心となったネットワークで、本当の自主活動団体が中心となったところは宮前区の野川セブン１つでした。ほかと足並みをそろえるために「駄目です」と言われたのですが、「そんなことを言っても要綱には書いてあるじゃないですか」ということで強引に始めたのが、野川セブンの地域ネットワーク会議でした。

強引に始めたものですから、私たちは何とかこれを成功させたいと思って、毎月とりあえず集まりましょうということにして、地域で何が起こっているか、個別のケースを話し合う会議を毎月毎月、10年間続けてきています。そこには、地区社協、民生委員、老人会、行政、地域の施設関係者、ケアマネジャーなども含めて24の団体に参加していただいて、「あそこの誰々さんが、どうも最近ごみの出し方がおかしくなってきている」「息子さんと２人で住んでいるのだけれども、息子さんは朝早くから夜遅くまで帰ってこないし、この人のことが心配よね。包括さん、何か知恵がないかしら」といって一緒に動き始めるなど、地域の方と協力しながら地域の困り事をどうしたらいいだろうということを話し合っています。今は地域包括支援センターの運営会議も兼ねています。

５．どこでもアンテナ

ネットワークというと、どのぐらい自分たちがアンテナを持っているかでつなぎ先が決まってきますが、私たちは次々にアンテナを広げてきました。特に、先ほどの「私たちも参加する場所がありますか」と言われたご夫婦は、数年後に奥さんが寝たきりになったのです。そのときにご主人は自宅でずっと見届け

たい、けれども医者に行けないということで、そこから往診できるお医者さんのネットワークをつくりました。町の中のお医者さんを何軒か歩き回って、今７名の先生が協力してくれています。

お医者さんの手がないと在宅生活を続けるのは難しいので、そういう医者のネットワークが必要ですが、もっと大切なのが、地域に住んでいるヘルパーさんや、あそこには看護師の資格を持ったお嫁さんがいる、あそこには薬剤師がいるといった個別の人のネットワークです。急に夜何かが起こったときにどうするか。例えば、「ばあさんが突然熱を出したんだけど、解熱剤は何を飲ませたらいいのか」という相談まで来るのです。夜だと相談する場所がない。お医者さんともなかなかつながらない。そういうときに、「ちょっと待ってね。あそこに薬剤師のお嫁さんがいるから」と言って電話をすると、すぐに調べてくれるのです。

それから、「ベッドから落ちてしまった。でも、引き上げられない」という電話がかかってきたこともあります。私１人が行っても、あるいは近所の人が行っても難しいので、もう夜の10時だったのですが、「あの家の人、ヘルパーだったわよね」ということで、「悪いけど、ちょっと一緒に行ってくれない」とお願いしたら、「私でも役に立つかしら」と言ってパジャマ姿のまま来て、ベッドに引き上げてくれました。その間にお医者さんに連絡をして「先生、今、○○さんがベッドから転んだんだけど、明日の朝まで大丈夫かしら」とか、「先生、今すぐ来てくれるかしら」という連絡が取り合えるような、最も身近なところのネットワークがとても大切です。

それは、その場その場で必要になったからこそ生まれてきたネットワークです。誰がつくり出すものでもなく、ひとつ１つの困難、私たちが重ねてきたひとつ１つの失敗から、ではどうしたらいいかを考えるという活動になっています。

６．私のための楽しみの場「ミニデイ」

ミニデイサービスは、地域の中のお集まりの会です。「私たちでも参加できる場所がありますか」と言ってきてくれた人のための活動が、今は毎月２回行われています。

近隣の施設からの参加も非常に多いです。奥さまが車いす生活になり、その

介護者であったご主人もうつ病と少しの認知症があって、２人だけの生活が難しくなって近くの施設に入ることになったのですが、ご主人がぽつりと「もうしょうがない。息子は遠くにいるから当てにできないし、妻と２人の生活にもくたびれた。おれも限界だ。でも、寂しいな。あんたたちと切れちゃうんだよな。あそこに入ったら、二度と世の中に出られない」とおっしゃったのです。社会と切れてしまう。それほど決心して施設にお入りになるのだということにはっとして、「いや、そんなことないよ。歩いて５分で来られるから、来れば？」、「いいかな」ということで、施設からの参加が今も続いています。

最近は体力も落ちてきて、食事も細くなりましたが、甘いものだけを召し上がって、みんなの顔を見てはにこにこして、帰るわけでもなく数時間を楽しく過ごしています。この人のための活動が施設からの参加になり、また、理容院に行けない方のために、１カ月に１回、近くの美容師さんに来ていただいて、１コイン（500円）でヘアカットをしてもらっています。いろいろなところから助成金をゲットして、美容師さんには1,000円差し上げています。美容師さんは「僕が勉強させてもらいに来ています。お年寄りからいろいろなことを学ばせていただける、本当にいい場所です」と言ってくださいます。やはりいろいろな方を巻き込んだ活動にしていかないと、なかなか地域に理解されるまでには発展していかないのかなと思っています。

おとといもミニデイがありました。中にはヘアカットにだけでも行きたいとおっしゃる方がいます。それでもいいのです。おしゃれをすることが目標で、ミニデイに車いすでも行きたいという方が、実際に増えています。ミニデイにはボランティアを含めて、１年間で約1,820名の方が参加しています。最高齢のボランティアさんは87歳です。87歳でも「僕はボランティアだ」と言っています。年齢は関係ありません。

７．楽しさ満載、男の出番

「私と妻が参加できる場所はありますか」と言ってきてくれた方は、奥さまはもう亡くなられていますが、ご主人とは今でもかかわっています。男性は、介護していた奥さんが亡くなったところで関係をぷつっと切ってしまうと、地域との接点がなくなって孤立してしまいます。介護保険のサービスはそうなのです。その人のサービスが終わったら、ヘルパーさんも、ケアマネジャーさん

も、いろいろサービスが入っていたものが一切なくなります。私は、実はそれで大失敗しているのです。

ある男性がお母さんの面倒を見ていたのですが、お母さんが亡くなった後、強く誘わないでいたら、ある日スーパーで会ったときにこう言われました。「お元気？」、「寂しいもんですね。誰も来なくなりました」、「じゃあ、遊びに来たら？」「いやあ」と言った２カ月後、その家は取り壊しになりました。彼はどこかに引っ越していったのでしょう。とても寂しい思いがして、「いやあ」と言われたときに何か一言かけられていたらよかったと思っていました。特に男性の場合はすずの会が次のつなぎの場所となって、その人の得意なところを生かしたお手伝いがしていただけるように、今いろいろ仕掛けをしています。「男組」もそのひとつで、問題を抱えた人から、介護者、ボランティアなど、いろいろな男の人たちがかかわってくれています。

８．夢を叶える

今日は民生委員さんがたくさんいらっしゃると伺っていますが、民生委員さんはとても志が高くて、「おれはいつも地域のために頑張っている」と思っている方が多いと思うのです。まさか自分が要介護状態になるとは思っていないのです。それは大間違いなのです。いつか何かが起こってしまいます。

例えば、元民生委員で野川地域のまとめ役をなさっていた方が、奥さまを亡くされた後、気丈に振る舞っていたのですが、ある日うちのメンバーにぽつりと「おれ、２年間、風呂に入ってないんだよ」とささやきました。シャワーは浴びていたのですが、浴槽に入ることが怖いというのです。体調もちょっと悪くなっていたので、ひとり暮らしでお風呂で事故でも起こしたら怖いと思って風呂に入れなかった。「ゆっくり風呂に入りたいと思ってるんだよ」とおっしゃったのです。「介護保険のサービスを何で使わないんですか」と言ったら、「おれが何で介護保険なんだ」と言うのです。「おれはいつもみんなのために、『あんた、介護保険を申請しなよ』と言ってきた。そのおれが何で介護保険のサービスを使うんだ。おれだってプライドがある」とおっしゃったのです。「でも、お風呂に入っていないんでしょう」と言って、やっといろいろなサービスにつながっていったのですが、そのきっかけをつくるのにとても長い時間がかかりました。彼は「みんなを楽しませるのがおれの役目だ」と言っていたので、こ

の人の夢はみんなを楽しませることなのです。彼は今すずの会に来て、皆さんの中心になって楽しませる役割をしてくれていて、80代、90代の独身のおばあちゃんたちの人気者です。

また、ある男性はちょっと状態が悪くて、奥さんと２人暮らしです。外に出ることが難しかったのですが、車で１時間ぐらいのところへみんなでバスハイクに行くというときに、「死んでもいいから連れていって」とおっしゃいました。この人は何しろみんなと一緒に外に出掛けたいというのが夢だったので、準備万端整えて、みんなと一緒に外に出掛けるという夢を叶えてさしあげました。

９．不思議な魅力

先ほどお話しした、美容院に行きたいからミニデイにいらっしゃるという女性は、大腿骨を骨折して車いすになって娘さんのところに田舎から呼び寄せられて来て、地域に友だちがいなくて、ぽつりとマンションの中で過ごされていた方です。暮れの12月29日に「私、娘に虐待されています」と、いこいの家に飛び込んでこられたのですが、虐待でも何でもないのです。娘さんもこの方もお酒が大好きで、お酒を飲むとバトルになるらしく、実の娘と親なので遠慮容赦なく本当に殴ったりけったり、「あんた、出て行け」という話になって、お酒のにおいをぷんぷんさせながら「泊めてくれますか」と言って来たのです。

困ってしまって、もちろん行政の人や民生委員さんなどに隣の部屋で待機してもらって、３時間ほど話を聞いて落ち着いたころ、「24時間つながる電話があるからね」と言って携帯電話の番号を渡し、「分かった」と帰っていかれました。何とかお正月も過ごせて、今は娘さんと仲良くやっていますが、娘さんにも悩みがあったのです。夫と離婚したりうまくいかなかったりいろいろあって、ぶつける先が親しかなかったのでしょう。だからバトルになってしまって、虐待にもなる。今は娘さんも時々すずの会のボランティアに参加してくださって、やっとうまくいくようになりました。

このおばあちゃんはとても優れもので、歌は歌えるし、ダンスも踊れるので、介護度４で家では寝たきりだった男性をミニデイに連れてきたときに、「今日、ちょっと問題のある人が来るけれども、カラオケが好きだしダンスが好きだったというから、１日付き合ってあげてよ」と言ったら、きゅっと寄り添って、その寝たきりの人にダンスを踊らせてしまったのです。私もこれには本当

に驚きました。やはり女性の魅力には勝てなかったということでしょうか(笑)。本当にこんなことが起きてしまうのです。「寝たきりをつくる」と言いますが、この方もつくられた寝たきりだったのです。やはり女性はいつまでも魅力的でなければいけないのだと、つくづく感じた次第です。

10. ご近所サークル「ダイヤモンドクラブ」

ミニデイは大きな地域の中での居場所なのですが、これだけでは本当にすき間なく地域全体を網羅したことにはならない、ちょっと気になる人を真ん中にしたようなお集まりの会でなければいけないと思って６年前に始めたのが、ダイヤモンドクラブです。格好いい名前でないと、○○サロンといっても魅力に欠けるので、ダイヤモンドクラブと名付けました。ダイヤモンドはクロスカットでしょう。小さな光をぴかっと光らせて、それを次々とつなげていくと大きなダイヤモンドになる。そう思って名づけました。

ご近所単位のつながりですので、せいぜい歩いて５分か10分ぐらいの人がお茶飲みに集まっています。そこには必ず気になる人が１人入っているということが条件です。緩やかな関係をつくることが目的です。「毎月やりましょう」といっても難しいので、毎月はやっていません。顔なじみの関係ができればいいわけですし、みんな近所ですから顔を合わせる機会がしょっちゅうあるので、みんなで集まるのは年に何回かでいいですよということになっています。参加費は１回100円ずつ持ち寄りで、会場費として１回3,000円ずつ差し上げています。ただし上限は１万円ですので、４回やっても１万円、10回やっても１万円、３回やれば9,000円です。このような感じで、さりげなく近所のお集まりをしています。

今は38カ所でやっています。このグループは認知症のひとり暮らしの方を囲むダイヤモンドクラブです。ひとり暮らしで認知症がひどくなって、だんだん家の中にごみがたまり、夜中に徘徊して家に帰れなくなると近所に「すみません、鍵がなくなってしまったのです」などという訴えがあったりします。１番困るのはご近所さんです。そこでみんなでどうしようかと話し合いをする、それをきっかけにダイヤモンドクラブが始まったご近所です。今、その方は相当認知症が進んでひとり暮らしが難しくなったので、グループホームに入所しましたが、ご近所サークルをやるときにはグループホームから参加してきていま

す。今は子育てママさん中心のダイヤモンドクラブになっています。

こちらは介護度５の方のためのダイヤモンドクラブです。介護保険のサービスを全部使ってもまだ足りない分を、ご近所さんが週に２回、お茶を飲みながらこの人のための集いの場を持たれてます。それだけでなく、近くに住むＹさんのためでもあります。Ｙさんは89歳で、「家の中で孤立しています」と言っていました。家の中での孤立は、大変つらいのです。娘や息子と同居しているのだけれども、私には家の中で役割がない。食事の時間も違えば会話もうまくできない。家の中で何もすることがない、寂しいですと言って来た方が、たまたまこの介護度５の方の真ん前に住んでいたので、お茶の係をしていただいています。これで彼女は週に１回役割を持つことができて、生き生きとしています。

11. 孤立から豊かさへ ―息子介護

もうひとつ、今、大変問題になっているのが息子たちの介護です。若い男性が親の介護のために仕事をやめざるを得なくなって介護に専念するのですが、この息子さんの場合は、母親が徘徊の非常に激しい重度の認知症でした。父親も軽い認知症で、そちらは働きながら介護していました。父親が亡くなって数年後に母親の介護が始まったのです。40代でしたが、仕事を辞めると経済的には親の年金だけですのできついです。ですから、介護保険のサービスも週１回のデイサービスだけしか使えていませんし、地域ともなかなかうまく接点を持てずにいました。彼自身は「おれは孤立していなかった」と言うのですが、やはり外から見ると孤立していました。

実は、ネットワーク会議の中で３カ月間ぐらい、「うちと同じ住宅の中にすごく心配な親と息子がいるのよ。ばあちゃんは毎日のように外を飛び歩いていて、その後を息子が追いかけている。でも、なかなか声が掛けられない」という話は聞いていたのですが、どのように接点を持てばよいのか、難しかったのです。そのときに、地域包括から「心配なケースがあるので一緒に来てください」と言われて行ったのが、何とその地域で心配していた彼の家でした。それでつながってきた１つの事例です。今はすずの会のメンバーとして、とても重要な位置を占めています。

ご近所さんに介護仲間がいるので、彼はばあちゃんの徘徊のついでに介護者

の家に寄ってはリラックスしています。介護者の会ではないのですが、介護者同士がつながって、非常に心安らぐ仲間になっています。

12. いろいろな地域デビュー

32歳の引きこもりだった人が、お年寄りになぐさめられて、40を過ぎてやっと仕事に就くことができました。地域デビューするのに10年かかりました。この方は、すずの会に来てお年寄りにすごく褒められて、やっと世の中に出られるようになり、ヘルパー２級の資格を取りました。この間、「恵子さん、10万円も稼げるようになったよ」と言ってとても喜んで来ましたが、こんなデビューの仕方もあります。

また、精神障がいを抱えた息子が100歳になるおばあちゃんの世話をしていましたが、このおばあちゃんは、先月お亡くなりになりました。亡くなった後、この息子さんの方がとても心配なので、そのまま関係を続けようということで、明日この人を励ます会をします。決して見逃さない、独りぼっちではないよとどこかでみんなが声を上げて、さりげなくつなげていくということが、とても大事なことではないかと思っています。

13. 活動資金

いつも活動資金はどうしているのですかという質問を受けるので、そのお話もしておきたいと思います。今年度は川崎市の市民活動センターから、要援護者・介護者も集える居場所づくりということで、140万円の助成金を頂きました。そのほか、共同募金から30万円と、会費、バザー、冊子等の売上などを活動資金に充てています。たとえば、私たちの手法をまとめた『ご近所パワー活用技術』や、男性介護者の本音を書いた本なども売っていますので、よかったらお買い上げいただければと思います。

最後に、昨年の夏、おばあちゃんの徘徊がひどくてくたくたになっていたところから、ミニデイに参加して息子さんとおばあちゃんの表情がふわっと変わってくる様子を３分間見ていただいて、私の話を終わりたいと思います。お付き合いいただきまして、ありがとうございました（拍手）。

― ビデオ上映 ―

（松端） 鈴木さん、ありがとうございました（拍手）。紹介いただいた写真は、息子さんがお母さんの介護をしていたり、一緒に過ごしている場面の写真ですね。非常に閉塞感のある、閉じられた関係が、鈴木さんたちとかかわることによってどんどん開かれていって、そのことが表情にも出ていて、目に見えて生き生きしてきていることが伝わってくる写真でした。ちなみに、鈴木さんが撮られたのですか。

（鈴木） そうです。カメラマンは私です。この本の表紙の写真も私が撮っています。

（松端） 素晴らしいです。どうもありがとうございました（拍手）。

鈴木さんからは、ご近所再生・地縁ネットということで、地域のつながりをもう一度つくっていこうという取り組みについて報告していただきました。大阪では小学校区を単位に皆さんが中心になってネットワークの組織をつくっていますが、川崎市の野川地区の場合は、鈴木さんのようなボランタリーなグループがネットワークの要になっているという、非常にユニークな素晴らしい報告だったのではないかと思います。

では、大阪は地域の地縁をベースにした地区福祉委員会の活動が非常に活発ですので、そのあたりについて池田市の西岡さんと西尾さんから報告をお願いします。よろしくお願いします。

【実践報告２】

西岡　義晃　氏（池田市社協　石橋南地区福祉委員会　副委員長）
西尾より子　氏（池田市社協　石橋南地区福祉委員会　花花部会）

（西岡） ただ今ご紹介いただきました、石橋南地区福祉委員会の西岡です。まず、今回この研修会におきまして発表の機会をいただきましたことに、感謝したいと思います。

１．石橋南地区福祉委員会設立と30周年記念式典の開催

私たち石橋南地区福祉委員会は、昭和54年３月に、市内11小学校区のうちの

第４番目の委員会として、民生・児童委員さんを中心に各種団体の協力を得て設立されました。発足当時は会員も少なかったのですが、現在では福祉委員数も50名を超え、11の部会を組織して、部会ごとに総会で承認を得た年間計画に基づき、各種事業を展開しているところです。

昨年11月23日には、社会福祉協議会会長、池田市長、池田市議会議長、大阪府議会議員はじめ、多数のご来賓をお迎えして、設立30周年記念式典を開催したところです。式典後の第２部では、広報委員会が作りましたフォトムービーによる活動紹介や講演会、アトラクション、締めくくりとして11部会の１つである男性料理教室の皆さんが作ってくれた豚汁を参加者全員に振る舞いました。ひとつの区切りをつけるとともに、さらに地域の皆さまに期待され、喜ばれる委員会となるよう努力することを委員各自が確認し合い、決意を固めることができた、有意義な１日だったと考えています。

２．石橋南地区のプロフィール

石橋南地区は、大阪国際空港の北部と隣接し、およそ3,760世帯、7,650人で池田市全体の7.4％を占めています。高齢化率は22.86％で、市内平均21.33％を1.5％上回る比率となっていますが、年少者率は10.97％で市内平均の13.54％を2.6％下回っており、高齢者が多く、年少者が少ない地域といえます。私どもの地域の社会資源には、幼保一元化を実現した「なかよしこども園」をはじめ、記載の諸施設・機関があります。

３．石橋南地区福祉委員会のプロフィール

石橋南地区福祉委員会は、小地域ネットワーク事業の４部会と、総務部会から花花部会までの７部会から形成されています。この中で珍しい活動として、協力校部会で行っている「ふれあい給食」が挙げられます。これは世代間交流の１つとして、６年生児童５～６名のグループと各種団体ごとに12～13名が、児童たちが配膳してくれた給食を一緒に食べながら、約１時間、昔のこの地域の出来事や遊びなどについて話し合い、交流するものです。各部会は年間計画に基づき、創意と工夫を凝らして事業を実施しているところです。

年間の事業費は、平成20年度決算では総事業費が131万5,392円でした。そのうち、本日紹介させていただきます障がい者支援の花花部会の決算額は12万

6,619円で、全体の9.6％となっています。また、社協会員の状況としては688口で、池田市社協全体の6.4％を占めています。11部会の活動以外にも、地区委員会全体で取り組む地域行事として、地域の祭り、社協バザー、募金活動等があります。今後とも地域の皆さま方と連携を保ち、協力を得ながらそれぞれの部会が創意と工夫を重ねて、対象者の皆さまに喜ばれる事業の展開に努めてまいりたいと考えています。

今回は、障がい者（児）支援を担当する花花部会の活動についてご報告申し上げますので、ご清聴いただき、ご意見をいただければ幸いです。それでは、部会担当の西尾さんにバトンタッチしますので、よろしくお願いいたします。

4．花花部会の活動について

（西尾） 私たちの部会は、障がい者部会として活動してきましたが、昨年度から花花部会としてスタートしました。花は、形や姿、香りは違っても、皆さんの心の中に自然に溶け込んでまいりますので、それを借りて花花部会と名付けました。

それでは、私たち花花部会の20年度の活動報告をさせていただきます。委員は６名（男性３名、女性３名）です。この中には子どもが作業所に通っている親も２人おります。その中の１人が私です。この６名のほかにも、サポートの必要な行事には他の部会から応援をお願いしています。

年間行事として、障がい者（児）支援を年４～５回行っています。まず、委員と親御さんとの親睦会から始まります。ここで前年度の反省とこれからの行事の打ち合わせをして、５～６月ぐらいにボウリングに出掛けます。隣の箕面市のボウリング場で４～５レーンをお借りして、２ゲームを行います。このごろではストライクも出るようになりました。ボウリングを楽しんだ後は、滝道を歩いて、途中の公園でお弁当タイムとなります。その後解散しますが、箕面の滝まで歩く健脚ペアもあります。

さらに、能勢のクッキングセンターでバーベキューも楽しみました。電車、ウォーキング、そしてケーブルと、ハイキング気分で行きました。少し遠出の旅なので、この行事も男性３人の応援をお願いしました。食糧がすっかりなくなるほどのすごい食べっぷりで、驚かされました。また、前年度には小学校の中庭を借りて、男性料理教室の皆さんと合同で、50人ぐらいでとてもにぎやか

に行ったこともあります。

11月ぐらいに、みかん狩りにも出掛けました。五月山のふもとのみかん園で、これもおいしいおいしいと、おなかいっぱいになりました。みかん狩りが終わった後は、五月山公園まで歩いてお弁当タイムとなります。お弁当を食べて、五月山公園の中には日本一小さな動物園がありまして、カンガルーやヒツジ、ウォンバットまでいますので、そこで楽しみました。また、少し遠出して須磨の水族館や王子動物園、大阪城と水上バスなど、フリーの行事も取り入れています。

こうした行事に参加できなかった人たちには、12月にクリスマスプレゼントを用意していますが、中にはクリスマスプレゼントも要らないからそっとしておいてほしい、放っておいてほしいという親御さんもおられます。こういう子どもたちをどうやったら誘い出せるのか、今少し悩みに思っていますので、また教えていただけたらうれしいです。

これらの行事は、必ず家族やヘルパーさんと一緒にお願いしています。子どもだけ参加させてほしいという声もありますが、支援体制の難しさからペアでの参加をお願いしています。各行事の費用は、交通費は各自負担していただき、お弁当など他の費用は地区福祉委員会の負担でお願いしています。

わが子のことで恐縮なのですが、私の子は知的障がいがあり、他人とのかかわりが下手で、つらいこともつまずきも表面に出すことができずに全部飲み込んでしまって、たびたびダウンしてしまうことがあります。しかし、小学校・中学校と地域で過ごさせていただいたおかげで素晴らしい先生方との出会いも生まれ、また、地域の福祉活動のおかげで、今では心の扉も少しですが開きかけて、元気に頑張っています。「声を掛けると、手を振って答えてくれたよ」とか、「笑い返してくれたよ」という声も聞けるようになりました。これも、親の知らないところでの、地域の方々のかかわりの力だと思います。継続は力なりとよく聞きますが、まさにその言葉のとおりだと思って感謝しています。そんな地区福祉委員さんの中には、作業所のボランティアに行ったり、作業所の評議員をされている方もあって、まさに地域に育ててもらっています。

行事を振り返ってみて、幼稚園・小学校に通っている子どもたちの参加が少し少ないのですが、地域での通園・通学の中で学習や遊びを通じてかかわりが持てているからだと思います。これから高校や作業所と進む段階で進路が分かれていくとともに、友だちとの関係も、地域との接点も少なくなっていくと思

います。そんなときでも、地域福祉活動、地域福祉としていつでも参加できるように見守り、声掛け、行事などの受け皿づくりと体制づくりが大切だと考えています。そして、私たち当事者が福祉委員として、また福祉委員会の活動に参加して直接意見を言えること、それが活動に反映されていることは、本当に大切なことだと思います。いろいろな立場の人を考えてまちづくりを進めることは、なかなか難しいからです。

花花部会は、これからも社会福祉協議会や親の会の協力をいただきながら、家族と一緒に、共に考え、支えられる福祉活動を目指していきたいと思います。地域にも「いつでも応援に行くよ」というううれしい声もたくさんありますので、そういう人たちに支えられながら、頑張っていきたいと思います。人の輪、ぬくもりの輪を実感して過ごしております。これからも皆さんの支えの下で頑張っていきたいと思います。どうもありがとうございました（拍手）。

（松端） 西岡さん、西尾さん、どうもありがとうございました。冒頭、青木事務局長から、大阪府内では669の福祉委員会が組織されているというお話がありましたが、その中で、この石橋南地区は30周年を迎えます。また、福祉委員会の活動というと、どうしても高齢者の方が中心になっているかと思うのですが、石橋南地区では花花部会という障がい者を支援する部会を立ち上げて、日々、支援されています。西尾さんの息子さんも知的な障がいがあり、当然そこにかかわるということですが、地域の人と笑顔であいさつができるというのはいいことですよね。最近は、「不審者過敏症」というのでしょうか、独り言を言っていたり、１人でにこにこしながら歩いていたりすると、別に悪いことをしているわけでもないのに「怪しい人」という目で見られることが多いのですが、平素から地域の人とちゃんとかかわっていると、そこで笑顔で会話が交わせる。ごくごく当たり前のことだけれども、そのごくごく当たり前のことを実現するのが難しい中で、かなり意識的にそういう活動をされてきたということかと思います。また後ほどのディスカッションにおいて、さらに深めていきたいと思います。

続きまして、岸和田市の西村さんから、よろしくお願いいたします。

【実践報告３】

西村　光雄　氏（岸和田市社協 新条地区福祉委員会 小地域ネットワーク活動推進委員会委員長）

（西村） 岸和田市の新条地区から参りました西村です。今日はこのような場で発表する機会をいただきまして、ありがとうございます。私たちが平素取り組んでいる新条地区の小地域ネットワーク活動の仕組みと活動の一端をご紹介申しあげることで、発表に代えさせていただきたいと思います。

１．地区と福祉委員会のプロフィール

新条地区は岸和田市の北部に位置し、北は忠岡町に隣接している人口約１万人の地域で、四つの町からなっています。そのうち２町が在来の町、あと２町は郊外の集合住宅です。こうした新条地区ができたのが、昭和40年過ぎだろうと思います。異なった環境を持つ４町が協力し合うまちづくりをするために、地域の先輩たちはいろいろとご苦労なさったと伺っています。

昭和50年ごろ、岸和田市においては、24ある小学校校区ごとにコミュニティをつくっていくために、市民協議会が創設されました。校区でこの市民協を設立すると市から助成金が出る、地域のまちづくりをする体制ができたわけです。新条地区は、昭和53年岸和田市の中でも早々にこの市民協議会が設立されました。その後、地域の先輩たちが、協力するまちづくり、“なかよし”のまちづくりを目指してご努力してこられ、現在においても、「みなさんの笑顔とあいさつうれしいな」というスローガンの下、まちづくりを推進しているわけです。

私たちの活動している小地域ネットワークは平成10年にスタートしましたが、私たちの校区は14年２月に、市内の24校区の中でもかなり遅れてスタートしました。そういった状況の中で、地域の先輩たちの願いを受けて活動し、小地域ネットワークの組織を「なかよし新条」と呼んでいます。

その福祉委員会を中心にしたネット活動の仕組みはどのようになっているかというと、市民協議会の福祉部会がその中軸を成しているわけですが、このメンバーだけでは心もとないという声もあったので、一部メンバーの入れ替えをし、補充をして、現在24名で小地域ネットワーク推進委員会を組織しています。これが活動の中核を成して、年間事業の企画、４町の活動の調整、情報交換、関係機関との密なる連携、指導等を仰ぐようにしています。これが各町の連絡

会と通じています。推進委員会は２カ月に１回、現在では偶数月に定期的に開催しています。各町の連絡会は、町会長はもちろん、福祉関係、特にボランティアを中心にして毎月定期的に開いており、活動の企画、運営、連絡等々をしています。現在、個別訪問をさせていただいている対象者は、４町で385名、協力者・ボランティアが87名という数で活動を推進しています。

２．主な活動とそのねらい

独居老人、高齢者、障がい者等々の個別訪問活動を、各町月１回を原則に、２～３人のペアで行っています。これは、ふれあいを深めるとともに、高齢者の孤独死の早期発見、昨今では災害時の高齢者の安否確認の体制づくりを主眼にしています。

また、グループ援助活動については校区単位と各町単位の２種類がありまして、校区単位は年６回、町単位は年２～６回、町によっては20回ぐらい開催されている町もあります。そのグループ援助活動のねらいは介護予防です。従って、生き生きサロンの普及に取り組んでいるわけですが、そのほか、後ほど申しあげますようないろいろな催しで「集いの場」を設定しています。それと、ひとり暮らしの高齢者の閉じこもり予防を主なねらいとして、お誘いさせてもらっています。

そのほか、子どもたちの安全のため、登下校に際しての子どもたちの見守り活動にも併せて取り組んでいますが、新条校区も少子高齢化が進行し、高齢化率は２割を超してきています。小地域ネットが設立されるまで、登下校中の小学生に対していたずらをする不審者の出没、あるいは中学生・高校生の少年非行等が激増していました。また、地域には岸和田競輪もございます。やはり開催の時期には空き巣、悪質商人の横行等々、非常に乱れた環境がありました。住む子どもたちや高齢者が生き生きと安心・安全で暮らせる地域づくりこそが、明るいまちづくりの原点ではなかという観点の下、私たち小地域ネットワークはそれぞれの活動に従事し、その意識を深めるように学ばせていただいているわけです。

３．グループ援助活動のご紹介

ここで、ちょっと変わったグループ援助活動を紹介させていただきたいと思

います。

まず、高齢の集合住宅地域、星ケ丘という町では、平成20年６月に区の福祉事業の一環として、町内の集会所の一角に喫茶コーナーを設立しました。町内の人々のふれあいの拠点としてつくっていただいて、１年半ほど経過していますが、町民、特に高齢者の絶大な協力の下に、絶えず人々の集いの場、いこいの場、ふれあいの場になっていきているのは、非常に喜ばしいことだと思います。コーヒー１杯100円という料金で、地域内の他の町の皆さんが公民館でクラブ活動を終えて帰り際などにここに立ち寄って、いろいろと世間話をし、集いの輪を深めておられます。地域全体として本当にありがたいことだと思い、小地域ネットワークの活動拠点として、盛大に全会員で取り組ませていただいています。

また、町によっては、町内のお寺の本堂をお借りして集いの場を催しています。地域の方々の特技、あるいは特色ある方々をお招きしてお話を聞き、その後で茶話会を開いたり、童謡を合唱したりして、２時間ほど明るく愉快に過ごさせていただいたりしています。場所の設定について、「何で福祉活動をこんなところで」と言う方は１人もなく、「お寺さんは落ち着いていいな。やっぱり仏さんの前でこうしてお話を聞くのは、公民館で聞くよりも何か落ち着くわ」というお声を聞かせていただいています。

いまひとつ変わったものとして、秋に高齢者の手作り作品展が催されています。これは当初、ある町が先駆けてスタートしたものですが、それに倣って現在では４町ともこの催しを行っています。この間もある町の会長さんが、「今まで閉じこもっていた方に出展のお願いに行ったところ、初めは恥ずかしいと言って躊躇されていましたが、出展してくださいました。当日、鑑賞に来られて町の方々とのふれあいができたのをきっかけに、その後、グループ援助活動、生き生きサロンに顔出しをしてくれています。非常にありがたいことです」とおっしゃっていました。

４．継続の秘訣

現在、こうした活動を通じて小地域ネットワークづくりに取り組んでいるわけですが、スタートして早8年、今考えますと本当によく続いているなと思います。このようにネット活動が定着し、進展している理由は何かと振り返りま

すと、「やるからには続けていこう」「対象者の依頼心をあおらないようにしよう。あくまでも自立支援を主眼にしよう」「人権尊重を厳守する」という4町共通理解の下にスタートしたことにあるように思います。

具体的な継続のポイントは、１つはボランティアは町民の自主的な応募に限るということです。社協から補助金をちょうだいするため、町会の役員人事で「頼むわ」「しようがないな」でやったところはほとんど中断しています。ここに続いている大きなポイントがあるのではないかと思っています。２つ目は続ける限りは無理しないようにしようということです。訪問回数、内容等々、一発勝負で催しをしても、祭り騒ぎで終わっては、私たちのねらう高齢者の生き生き地域づくりは続くものではありません。３つ目は会議の持ち方です。これについては時間の都合上、またディスカッションのときに言わせていただきたいと思います。

５．認知症とのかかわり

先ほどご発表のあった地域と違い、特に認知症を対象にはかかわっていませんが、個別訪問活動を通じて、「○○さん、このごろちょっとおかしいで」というような気付きがあった場合には、各町の定期連絡会で話し合いを持ち、やはりおかしいということになると、常にご指導・支援をいただいているCSWの方にお願いして一緒に訪問させていただき、即対応できるような体制ができています。特に、私たちボランティアの方から決め付けるわけにはいきませんので、気付いた場合はまず身内に連絡を取り、了解を得た上で、場合によっては関係機関にお世話させていただくという方法で、認知症に疑わしい方々との対応を取っているわけです。

また、地域にあるグループホームと日ごろから密に交流しています。実は私はそこの施設の運営委員の一員になっていまして、１～２年前から行事があるたびに案内を差し上げ、職員ともども来ていただいて、喜んでいただいています。私たちボランティアの方も、認知症の方にどのように対応したらいいのだろうか、どういう雰囲気なのだろうかという前向きな姿勢で学習を望む方がおられたときには、施設に連絡を取って訪問させていただき、入所者との対応、話し合い、ふれあいについて学習させていただくなど、認知症への理解を深めています。

6．活動の意義と評価

やはり続けていくところに定着があり、定着しているから地域に浸透している、それが地域住民に評価され、協力していただいているのだと思っています。そうした中で、ふれあいの広がりが月ごとに深まってくるような報告を、毎月の会合で受けるわけです。当初は押し売りと間違われるような場面も多々ありましたが、現在では「今度、いつ来てくれる？」というような期待を持って迎えていただいています。こういったことが安心と明るさ、地域の防犯にもつながっているのではないか。子どもたちや高齢者の生き生きする地域づくりこそが、地域の活性化につながるのではないか。このように自負しながら、活動に取り組んでいます。時間が来ましたので、これで終わらせていただきます。ありがとうございました（拍手）。

（松端） 西村さん、どうもありがとうございました。なぜ活動がうまくいっているのか、組織づくりのポイントで、「無理をしない」、「お祭り騒ぎにしない」ということをおっしゃいました。岸和田はだんじりが盛んですが、この活動はお祭り騒ぎにせずに、継続、定着、浸透、ふれあいの広がりと深まりというような形でお話を整理していただきました。また後ほど話を深めていきたいと思います。

ディスカッション

（松端） それでは、これからディスカッションを進めていきたいと思います。先ほどひととおり報告をいただいたのですが、もし補足がありましたら、まずお伺いしたいと思います。鈴木さんからお願いします。

（鈴木） 私たちの活動は素人の集団で、あまり整合性のないところから出発しています。ただ、生活をしている日々の暮らしのプロではあると思うのです。日々の暮らしから見えたものを形にしていったことで、地域の方から信頼される活動に育ってきたのだと思いますが、地域の住民活動が万能選手かというとそうではなく、例えば専門職など、いろいろな機関との連携がないと、地域活動は万全なものにはならないと思っています。

実は10日ほど前に、これだけ一生懸命やっていたにもかかわらず、私たちは初めて孤独死を出しました。ひとり暮らしで親戚もあまり近くにいらっしゃらない方で、要支援だったので、地域包括支援センターがかかわっていたのです。週１回ヘルパーさんが来ているし、民生委員も来ている、ご近所サークルもやっている、老人会にも入っているという、結構いろいろなところに参加されていた人なので、何か変化があればいち早く見つかるはずだったのです。私たちはミニデイをやるときには、その４日ぐらい前に「お変わりありませんか」という電話を必ずしますし、気になる人にはもっと頻回に、週に１回電話するとか、近所の人が訪ねていくとかということをしていますが、彼女の場合、通りかかると雨戸が開いているなど、表から見える様子は変わらなかったので、みんなが気付かなかったのです。

ただ、夜電話をしても出ない。朝電話をしたらまだ出ない。心臓が悪くて入退院を繰り返していた人だったので、もしかしたら入院しているのかと思って、いつもの入院先に電話したのですが、「個人情報なので、入院しているかどうかは教えられません」と言われてしまいました。そこはネックですよね。そこで、ご親戚の方に電話をしたら、「いや、数日前に電話で話して元気でしたよ」という話だったのです。それでも気になって、「電話に出ないので行ってみてください」と包括支援センターに電話をしたら、緊急通報システムの会社が鍵を持っているのでそこに連絡をして、警察の方が中に入ったところ、ベッドの中で静かに亡くなっていました。４日目でした。４日間、気付かなかったのです。

私が電話をもっと頻回にかけていればという思いはありますが、でも４日間でよかったのか、もっと早く気付いてあげていたら何か手立てがあったのか分かりませんが、幾ら万全にやっていてもそういうことがあるのです。ただ、彼女はいつも「私に何かあっても、ここにこういうものがあるから」「片付け物はこうなっているから」「誰々に知らせてね」ということは全部教えていてくださったので、それだけの覚悟をしておられたのだと思います。寂しいかもしれないけれども、おひとりで暮らすということはそういうこともあるのだという覚悟をして、ひとり暮らしを続けられていたのだということを実感しました。

（松端）　ありがとうございました。ひとり暮らしをしているということは、年齢にかかわらず死と背中合わせで、誰も近くにいないわけですから、いつ亡く

なってしまったか分からない。死後４日目に発見されたということですが、その方自身はミニデイに通ったり、ヘルパーさんも来ていたり、いろいろな活動に参加もしているということなので、孤立しているというよりは地域の人とつながっている中で、でも空白が４日もできてしまったということをとても後悔されているというお話でした。

入院先に電話したら個人情報だから教えられないというのは、とても窮屈な社会です。善意で知りたい人がいれば、まさに悪意で知りたい人もいるわけですから、情報を提供する側としてはどうしても防衛的になってしまう面があるのだろうと思いますが、これも現代社会のひとつの弊害であるともいえます。ありがとうございました。

それでは、池田市の西岡さん、お願いします。

（西岡） 今回は、障がい者、特にハンディを持たれた方に対するサービスについてご報告させていただきました。小さい子どもさんから、ある程度お年を召された方までが対象になるわけですが、小・中学生の対象者の保護者とのかかわり方の難しさを、常々感じています。皆さんもそうだと思うのですが、その辺はどうしても学校でのいろいろな人との付き合い、かかわり合いがあるということで、地域福祉でのかかわりはどうしても薄くなりがちなのではないかと思いながら、少しでもお手伝いができたらと日々の活動を続けているという実情です。そうした中で先ほど発表したようないろいろな事業を展開し、１人でも多くの方に参加していただきたいと願って、日々、活動しています。

（松端） ありがとうございました。西尾さんはお子さんの調子が悪くなったということで急きょ帰られたのですが、そもそも地区福祉委員会と障がいのある方の支援というのは距離があったのです。そこが近くなったというのは、例えば西尾さんの息子さんに障がいがあって、その方が地区福祉委員会の活動をしているからという点もあったのですか。

（西岡） どうしても福祉委員会の中で、対象者をお持ちの方のご意見を反映しにくいということがあるのですが、たまたま私どもの方では西尾さんともう１人、障がいを持たれた子どもさんがいらっしゃる方がおられまして、その２人

からいろいろなことを提案していただく中で、われわれも勉強しながら対応を考えています。それと併せて、地域の方々の生き生きしたつながりの中で顔見知りができて、先ほど発表があったように、道で会ったときにあいさつができるよう関係づくりができてきたと思っています。

（松端）　地区福祉委員会（校区福祉委員会）の活動を通じて、もっと障がいのある方にもかかわる必要があるのだということは、研修会などでもよくテーマになります。皆さんの地域でも、ではどこにどんな障がいのある方が暮らしているのか、情報を教えてほしいと行政に言っても、個人情報の壁があって教えてもらえない。活動する側としては気になるし、活動したいと思ってもそこの接点がなかなかないのです。けれども、池田市の石橋南地区の場合は、メンバーの中に親御さんがおられてスムーズにいったということです。いきなり正面から情報をくれというパターンはどの分野でもしんどいかと思うので、１点突破で関係のある方としっかりつながりを持って、そこから広がっていくような手法も必要なのではないかと思います。

岸和田の西村さんはいかがですか。先ほど、組織づくりのところで、ポイントをまた後ほどというお話でしたけれども。

（西村）　２点ほど追加させていただきたいと思います。まず１点は、個別訪問活動で２～３人のペアでさせてもらっています。やはり認知傾向のある高齢者宅を訪問しますと、余計なことで疑いを持たれる場合もありますので、そういったことのないように必ずペアで訪問してくださいと言っているわけです。また、ペアで行きますと会議に出たら報告しなくてはいけませんので、サボることができない。そのサボりの防止と、対象者からいろいろな疑いを持たれないようにということで、ペアでお願いしているわけです。

もう１点は、先ほど、継続している理由のひとつとして、会議の持ち方を工夫していると言いました。特に訪問活動については、「○○さんは、けがをして痛い痛いと言っているけれども、どうなっている」というような質問が出ますし、その報告もありますので、毎月定期的に会議を持っていますが、会議については時間厳守で、どれだけ議題があろうとも９時には終わる。議題が少ない場合は30分で切り上げる。校区の対応も、地域の対応も、だらだらはやめて

くださいと釘を刺させていただいています。そして、必ずレジュメを作る。町の会合、あるいは地区の会合にしても、いつも構成員の80％以上の出席を賜っているのは、こういう形を徹底しているからではないかと考えています。

（松端） ありがとうございました。西村さんは、先ほどの報告の最後のところで、組織づくりのポイントは、１つは自主的に参加したい方に限るとおっしゃいました。組織を作るとなると、ついつい自治会長や役員の方に無理に入っていただくという形で進めてしまうところがありますが、まずは自主的な参加に限る。それから、無理をしない。３つ目が会議の持ち方を工夫しているということで、毎月定例で４つの町それぞれで会議を持たれているということですが、時間厳守で７時半～９時で必ず終わる。議題がなければ30分でも終わってしまうということです。

それから、訪問活動の報告をレジュメを作ってしてもらう。冒頭に鈴木さんからも素人の集団だというお話がありましたが、これだけ組織立った活動をしていると、お互いが気遣いをしたり、ルールを守ったり、単なる素人の集団の域を超えたようなところがあります。西村さんが会議で工夫されていることも、単なるインフォーマルな活動、ボランタリーな活動を超えた、一定のルールづくりがあるのではないかと思います。

それから、訪問活動も活発にされているわけですが、必ず２人なり３人で訪問する。これには２つ意味があって、１つはサボりの防止、日常顔を合わせているからといって訪問しなくならないようにするということと、もう１つは、認知症の方を訪問するときにはいろいろ疑いをかけられることがあるので、それを防止するということです。

小澤勲さんという人が、ご自身は肺がんで亡くなられたのですが、『痴呆を生きるということ』（岩波新書）という本の中で、次のようなことを書いていらっしゃいます。この方はお医者さんですので臨床経験があって、認知症の方とかかわることが多い方なのですが、一般的な傾向として、女性は「私の財布、どこにやったのよ」という物取られの妄想のパターンが多いのだそうです。では男性はどのような妄想が多いかというと、妻取られ妄想だそうです。先ほどの鈴木さんの話でも、男性が女性といて生き生きしているということでしたが、女性はそんなに男性に執着しないようです。女性は女性だけでわいわい楽しく

やっていけます。でも、男性は女性がいるかどうかでだいぶ違う面もあるようです。

こうした認知症の方の症状をふまえると、訪問するときには、１人だけで訪問してそれこそ「物がなくなった」と言われたら困りますので、複数で訪問するようにしているということはとてもいいことだと思います。また、男性の認知症の方へのかかわり方も工夫する必要があるのかもしれません。

今回のテーマは､認知症の方なり障がいのある方へのかかわりということで、活動の方針として、身の丈に合ったとか、本人の自主性を尊重するとかという面があるかと思います。大阪府では、府と府社協が小地域ネットワーク活動を全国に先駆けて積極的に推奨してきました。その内容は、１つは個別訪問の活動、もう１つはサロン活動を中心にしたグループ援助という２本柱であって、大体それをベースに活動されているところが多いと思います。一方、鈴木さんは思い付きと言ったら失礼ですけれども、ニーズに応じて柔軟に対応されていますので、大阪の各地でやっている活動に比べると、とても柔軟性が高いように思ったのですが、そのあたりはいかがですか。

（鈴木） そうですね、まさに思い付きなのです。思い付きというより、ここに転びそうな人がいたら手を出さなければいけない、目の前の困り事をどうしたらいいのかということなのです。ですから、思い付きの最たるものは例えばバスハイクなどもそうで、昔新婚旅行に行ったところにもう１回行ってみたいという人がいて、その人のために箱根へ行こうというところからバスハイクになったのですが、車いすの人をどうやって連れていくか、リフト付きのバスがあるらしいということで、もう40回ほどバスハイクに行っていますが、そういうことにつながっていきました。

あるいは、介護者が具合が悪くなることが非常に多いのです。介護者が具合が悪くなると、要介護者は即その日から困るわけです。先日のミニデイのときには、介護者が倒れたから来られないという方がいたので、こちらで作ったお昼ご飯を届けながら様子を見ることにしました｡そんなことがまた始まったり、男性介護者、特に若い介護者の場合、１人男性の若い介護者がいると、次の人を受け入れやすいのです。その若い男性介護者に､「悪いけど、また若い介護者が来るから相手をしてやって」ということでまた新しいニーズに応えられて

いって、次々と男性の介護者のご相談が増えていくのです。

それから、川崎の地区社協は、個別援助も訪問活動もしていません。もし地区社協がそういうことをしていたら、すずの会は必要なかったと思うのです。していなかったから始めてしまったのですが、地区社協は地区社協で、例えば会食会をちゃんとしてくれていますので、会食会に来られなくなった方たちをどうするのか。何となく暗黙の了解でそんな連絡を取っています。ですから、組織との連携は非常に大切です。

（松端） 大阪では、すずの会さんがやっているような活動は結構やっている面がありますが、川崎は地区社協がそういうことをしていないから、むしろ地域の中にはニーズがいっぱいあって、それに柔軟に対応してきた結果だということでしょうか。

最初の方のご報告でもありましたが、地域の中で心配なことをみんなで話し合って即実行するのだということで、具体的な例では、例えば一般に「逆デイ」といわれるような活動についてですが、特別養護老人ホームなどに入った人が地域のサロンに出てくるというのは、必要だといわれながらなかなか根付かないのが現状です。しかし、鈴木さんのところは一般論から入っているのではなく、今まで地域で暮らしていたご夫婦が、だんだん介護も大変になってきて施設に入られることになった、「施設に入ったら、地域の皆さんとの関係もなくなるな」という一言に反応して、「それだったら、入ってからも来たらいいじゃない」ということでいわゆる「逆デイ」活動を実現しているわけですが、とても柔軟な活動だと思います。

それから、聞いていて僕も「はっ」と思ったのは、介護保険は介護が必要な人へのサービスですので、その人が亡くなったりすると、残された家族へのケアはありませんし、一般に専門職の支援も対象者を特定してしまうので、なかなか家族は視野に入りませんが、その残された人にどう対応するかという問題です。

こうした問題も含めて、私たちが普通に暮らしていて、こんなことで困っているのだとか、こんなことが大変だと思ったことに、いかに柔軟に対応していけるかということが地域福祉においてはポイントだと思うのですが、何かそのための秘訣みたいなものはありますか。柔軟に耳を傾けるということですが、

そういうことは結構邪魔くさいでしょう。

（鈴木） 実は、「やめましょうよ」ということもたくさんあるのです。

（松端） 今日、最初にお会いしたときに、「もう疲れてへとへとなんです」とおっしゃっていましたが、それと関係あるのですか。

（鈴木） 疲れてへとへとというのは、やはり次々に困り事が見つかってしまうのです。やっていればやっているほど、見つけられてしまうのです。それにひとつ１つ対応していくと、自分の時間と、それから結構予算があったりして、そこをどうするかが難しいところで、それに家族の対応があるわけです。

（松端） 鈴木さんの熱き思いをそのまま受け取ってくれるとは限らないですよね。

（鈴木） そうですね。

（松端） 先ほど、西村さんのお話にありましたが、認知症の方の訪問に行ったときに、必ずしも快く受け入れてくれる人ばかりではない。そんなときは、西村さんはどのような対応をされているのですか。

（西村） 決して無理に訪問するということはしません。留守のところはメモを入れて次回に回したり、ちょっと体が弱ってきて気になるという方には、電話で連絡しています。奥さんを亡くして、ひとりでどうしているだろうという方に、「われわれはこういうことをしているのですが、よかったら訪問させていただきますよ」と言っても、「まだそんな必要はない」と断られる場合もあります。特に男性に多いのですが、そういった方はあえて訪問するということはせずに、その地区の協力員に見守りをしてもらうという形で続けています。

（松端） ありがとうございました。特に男性の方が拒まれる率が高いということですが、その人に対して常に私たちは関心を持っていますよというメッセー

ジを送り続けることが、多分、重要なのだと思います。

池田市の方では部会が11あって、特に男性がされている活動として男性の料理教室がありますが、そのあたり、組織づくりで苦労されているような点はありますか。

（西岡） 男性料理教室は、各小学校区ごとに開かれる地域の住民座談会で、「飛び出せ男性」という議題の中で話が進んだものです。たまたま私ども以外に池田市内の別の校区で男性料理教室をやっているところがありましたので、そういう話を聞きながらいろいろ話をしていく中で、たまたま男性料理教室に興味のある委員さんもおられて、1回考えてみようという話が決まりました。では、どこがどんなふうにかかわればよいのかという話になったときに、今申しあげた座談会に来ていた委員さんが地区福祉の委員さんでもあったことから、地区福祉委員会の中に男性料理教室という部会が発足して、今のところは偶数月ということで、年に6回実施しています。

（松端） ありがとうございました。地域の座談会があって、それをきっかけに男性を巻き込んでということですが、「飛び出せ男性」というのはいいですね。

鈴木さんのところのご近所サークルは「ダイヤモンドクラブ」という名前ですが、格好いい名前でないと駄目だという話です。大阪の人は、振りこめ詐欺では、息子がけがをしたとか病気をしたという話には反応がないらしいですが、もうかりますという話には飛びつくそうです。詐欺には一般に引っ掛かりにくいのに、もうかる話には飛びつく傾向があるようなので、それで言うと、サロンも男性向けの「もうかりまっせサロン」みたいなものをすると、もうちょっと飛びついてくれるかもしれないですね。

先ほど鈴木さんのスライドで、「男介」という言葉が出てきました。これは「団塊の世代」をもじって「男介」ということですが、そのあたりで何かありますか。男性をいかに巻き込むかということで。

（鈴木） 男の人というのは、うちの主人も含めてそうですが、自分が介護するなどということは考えていないのです。女房に介護してもらうのだと思っている男性が非常に多い。実は、私の母は60歳で倒れていますので、父親はまさか

61歳から母の介護問題が自分に振りかかってくるとは思わなかったと思います。でも、かかわってみると、男の介護者がどんどん増えてくるということが目に見えていましたので、男性の介護参加をどうするかということを考えて、もうこれは男介世代だなと思いました。在宅の介護者の３割以上が男性なのです。男性の介護というのは、ものすごく緻密にやっていらっしゃるのと、妥協を許さなかったり、自分で抱え込みやすかったり、なかなか弱音を吐かないというところがあって、そこに私たちがちょっと風穴を開ける役目ができたらと思っています。

（松端） 男性の方は、ひとり暮らしで孤立するというリスクも高いですし、男性が主たる介護者になっているときに、やはり孤立しやすいということです。鈴木さんは、お母さんの介護のときに救ってくれたのがPTAの仲間だったということで、女性は地域をベースにつながるきっかけが男性に比べてあるかと思いますが、男性はそういうところがあまりないので、そういう意味で男性の孤立を何とかしようということです。

今回のテーマが認知症の方とか障がいのある方という形で、特にそういうリスクの高い方を想定していますが、決め打ちしようというのはかえって良くないかもしれません。先ほどもお話がありましたが、家族もいるけれども、その中で孤立しているようなケースというのは、独りぼっちで暮らしているのとはまた違うつらさがあるかと思うのです。そういう意味では、障がいのある方をどう支援しようかとか、認知症の方を地域でどう支えようかということは確かに重要だと思いますが、皆さんの日々の活動の中でちょっと耳を澄ましてみると、あるいはちゃんと凝視してみると、ニーズはたくさんあるわけです。そのニーズにいかに柔軟に対応していけるか。その中に、例えば男性の介護の問題があるかもしれませんし、認知症や精神障がいの方、あるいは知的障がいの方の問題なども含まれてくるのではないかと思います。大上段に構えてやるぞとなると、多分、バリアがいっぱいあるかと思いますが、日々の活動を通じて、とにかく身近な、自分のできそうなところからチャレンジしてみるということが大切ではないかと思います。

最後に、一言ずつで結構ですので、何かこれだけは伝えておきたいということがあったらおっしゃっていただいて、その後、余った時間を僕のまとめにし

たいと思います。では、鈴木さんからお願いします。

（鈴木） やはり独りぼっちをなくそうよという気持ちが、地域活動の出発点だと思うのです。ですから、地域の中でみんなで支え合えるような気付き、発見を、自分たちのものとして考えていく。地域活動などというとハードルが高いのですが、自分でちょっとできることから始めることが大きな成功の第１歩ではないかと、いつも思っています。ありがとうございました（拍手）。

（西岡） 私どもとしては、笑顔でいろいろな方が私の顔を見てよかったなと思い、話し合え、あいさつができる、そういう気持ちで日々過ごしていきたいと思っています（拍手）。

（西村） 活動を続けている中で、特にグループ援助活動は参加者がどうも固定化してきているという感じを受けています。そういった面で、各行事を通じて初めてご参加いただいた人には必ず声掛けをして、次の参加も呼び掛け、感想をお聞きするなどして、絶対に無視しないように心掛けています（拍手）。

まとめ

松端　克文　氏（桃山学院大学社会学部社会福祉学科　准教授）

（松端） ありがとうございました。それでは、最後に僕の資料をご覧ください。これは今日のためにというよりは、地域福祉の話をするときによく使うオーソドックスな資料ですので、この中から幾つかピックアップして、今日のお話と絡めて最後のまとめにしたいと思います。

地域福祉というのは、地域の人が一緒に力を合わせて活動することによって、当然、困っている人に対してちゃんとサポートするということはありますけれども、そのことを通じて地域社会そのものも変えていきましょうという大きな目標のある活動だと思うのです。ですから、鈴木さんから「独りぼっちをなくそうよ」という話がありましたが、鈴木さんの話を聞いていて思ったのは、自分を特権的な地位に置かないということです。今までずっと活動してきた民生委員さんご自身が、自分が支援を必要とするようになるとは思っていなかった

とか、男性は自分が介護する側になるとは思っていなかったりということで、結構自分の中で固定観念みたいなものがあって柔軟に発想できないわけですが、自分を特権的な地位に置かない。自分が何かをする側ではなくて、自分も支援を受けることがあり得るのだという意識を持つ。「明日はわが身」という、昔、一番ヶ瀬康子先生が福祉を語るときに使っていた有名なせりふがあるのですが、自分を高見に置いて特権的な地位から見下ろすのではなく、いつ自分がそうなるか分からないというようなところから人とかかわると、共感したり共に生きるということができる可能性が開けてくるのではないかと思います。

ですので、１つはいかに「共に」かということです。今日のお話を聞いていても、何かをしてあげているというよりも、結局のところ一緒に活動しているということですので、いかにこの「共に」を実感できるか。この「共に」ということが実感できると、しんどいし邪魔くさいけれども、そこに喜びが得られる面があるのではないかと思います。

ちょうど今、泉大津市で社協が地域の方3,000名を対象に調査をしていまして、「住民がお互いに助け合うべき地域の範囲」はという質問に対して、約４割の住民が「隣近所」と回答し、同じく約４割の住民が「町内会・自治会」と回答して、小学校区を含めると９割弱の住民が町内会や自治会ぐらいの狭い地域、もしくは小学校より小さい地域だと答えています。町内会・自治会レベルから、せいぜい小学校区ぐらいのエリアを、自分の暮らしている地域だとイメージしていると思うのです。ですから、先ほどの「共に」とか、あるいは助け合う活動というのは、あまり広い地域になってしまうとそのように認識することが難しいのではないかといえます。当然、NGOで国境を越えて活動するような場合もありますが、私たちの生活に密着した活動というのは、比較的狭いエリアで、「顔見知りの関係」の中で作っていくような活動が展開しやすいのではないかと思うわけです。

大阪では、特に南の方へ行けば行くほど、地縁的なつながりが結構強いようです。地縁組織というのは運命共同体的なところがありますが、多分、これからの活動は「関与共働体」、つまり、何から何まで全部に関わるのではなくて、自分に関心のあることに少しだけかかわれるような人の輪を、いかに広げていけるかということかと思います。

西村さんからは、参加者の固定化というお話がありましたが、なかなか新し

い層が入ってくれにくいわけです。そんなときに、それぞれの地域でいろいろなニーズがあるわけですので、そのニーズに対して「何とかしてみようか」という人を掘り起こしていく。そして、何もかも頼むと大変ですので、その人の関心のある範囲で、自分のできることをちょっとだけやっていただく。今日、「身の丈」というキーワードが一つあったかと思うのですが、やらなければいけないことは山ほどあるけれども全部できるわけがないので、身の丈に合った、自分の関心のあることにちょっとだけかかわる。そのような人が多くいると、大きな力になります。そういう活動がこれから期待されているのではないでしょうか。

最後に、「協働の舞台としての地域」と書いてありますが、結局、皆さんは福祉委員であったり、民生委員であったり、その他いろいろな役職があって地域の中で活動されたり、あるいは全くボランタリーに活動されている方もいるかと思いますが、自分だけで、あるいは自分たちだけで抱え込んでしまうと、やはり困難な課題は非常に多いのです。今日、鈴木さんのお話を聞きながらすごいと思ったのは、とても「柔軟だなあ」ということです。ニーズがあって、そのニーズに鈴木さんが全部応えていると、多分パンクしてしまいます。そういう意味では、ニーズがあって新しい活動をしなければいけないときに、自分だけがするのでだはなく、その活動に参加してくれる人をしっかりと巻き込んでいくようなとこがあるのです。

ニーズを何とかするためには、どんな人たちとネットワークを組みながら活動していけばその活動が根付くのかということを考えた上で、地域にちゃんと地に足の着いた活動をする。そして、やはり住民が集いと交流する場所や機会がないと、しんどいと思うのです。池田市にしても、岸和田市にしても、会議が結構重要で、そこで話し合って確認して次の活動を生み出しています。そういう意味では、人が集って交流する機会を地域の中でいかにいっぱい作り出していけるかということが重要ではないかと思います。

そういう集いや交流があると、学び合いがあって、新たな気付きがいっぱい出てきます。先ほどの、ひとり暮らしになった男性がシャワーは浴びているけれども、何かあったときに不安で浴槽につかったことがないという話は、そういう方と話してみて初めて分かることで、本だけ読んでいても分からない世界です。そうやって人とふれあって、ざっくばらんに本音でトークできる所や機

会がいっぱいあって、その中で気付き合って、学び合って、危機感を共有し、連帯意識をはぐくむわけです。

平和だと、人と手を組んで何かをしようとはなかなか思えません。けれども、このまま５年、10年いくと、自分も介護が必要になるかもしれない。あるいは、もし今災害があったらどうなるのか。普段、平和に暮らしているとそうそう気付かないわけですが、ちょっと冷静に考えてみると、危機に満ちあふれているのです。特に今の社会は、雇用の崩壊、家族機能の崩壊ということがよくいわれています。日本の福祉は先進国でも最も低い水準なのですが、なぜそれで国民が不満を言うことなく今日まで来たのかというと、１つは雇用なのです。日本の社会は、男性が働いて主に女性が専業主婦とパートで切り盛りしてきたところがあって、男性が働く会社は国の保護的な規制に守られて、いろいろ補助金などが出たりしながら安定して働けて、しかも年功序列・終身雇用という雇用の仕組みがある。奥さんは子育てしながら、時間があったらパートに出るというような形で、日本の社会は回ってきたわけです。雇用自体が不安定なヨーロッパやアメリカと違って、日本は雇用が安定して、同時に家族の扶養機能をあてにできたから福祉のサービスが低くて済んだわけですが、その雇用が今崩れていて、家族の扶養機能も低下しています。

ですから、ひとり暮らしの方の不安も大きいですが、同居している家族の中に危険がいっぱい潜んでいて、例えば高齢者虐待や障がい者虐待の問題があります。近々、障がい者虐待防止法ができると思いますが、障がいのある人を虐待してしまう。決して悪気があって虐待するわけではないのでしょうが、日々の負担感がたまってきて虐待になるようなケースがたくさんあるわけです。そういう意味では、そんなに大層なことを考えなくても、普通に私たちの生活を冷静に振り返ってみると、至る所に危機があるのです。そういった危機感をひとつのきっかけにして、連帯意識をいかにはぐくんでいけるか。そういった連帯意識がはぐくめると、支え合いの活動につながっていく可能性があるのだと思います。

大阪では、地区福祉委員会、校区福祉委員会の活動をベースにして、小地域ネットワークの活動が非常に活発ですが、５年前と比べてどれだけその活動を担ってくれた人が増えているのかというと、組織はできたけれども頭打ちしているような面があるかと思うのです。そういう意味で、地域の中で危機感を共

有しながら、それぞれの関心に応じて緩やかにつながっていけるようなネットワークをいかにつくっていけるかが課題かと思います。そのときに、例えば地域の中で認知症の人をどう支えようか、あるいは障がいのある方をどのように支えていこうかということも、大きなテーマになるのではないかと思います。

岬町では、町内の60の自体会ごとにサロン活動を実施しているのですが、さらに「共生型のサロン」15か所があって、コミュニティカフェというものをやっていて、そこのウエーターを長年引きこもっていた精神障がいのある方がやっていて、そこには地域の高齢者も来たり、認知症の方も来たり、あるいは子どもも参加したりということをされています。

そこに関わっている町社協や地域の方々にはある種の目標もあったのでしょうけれども、基本は目の前にニーズがある、そのニーズに対して、謙虚に自分たちができることを少しずつ積み重ねていくということだと思います。その積み重ねでそういった活動が広がっていくのだと思うのです。

それでは、そろそろ終了したいと思います。どうもありがとうございました(拍手)。